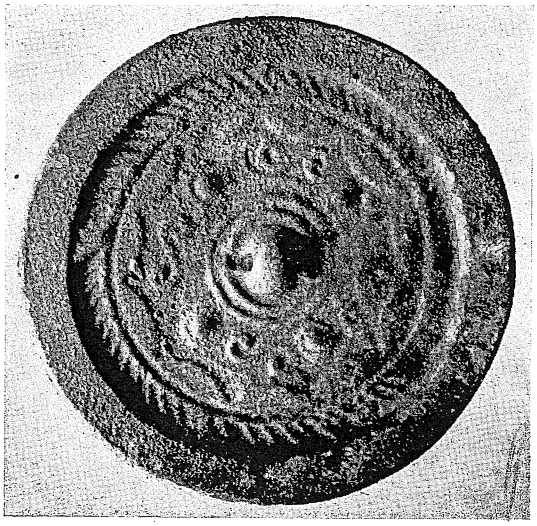
(1)

第1号

亀ノ甲遺跡

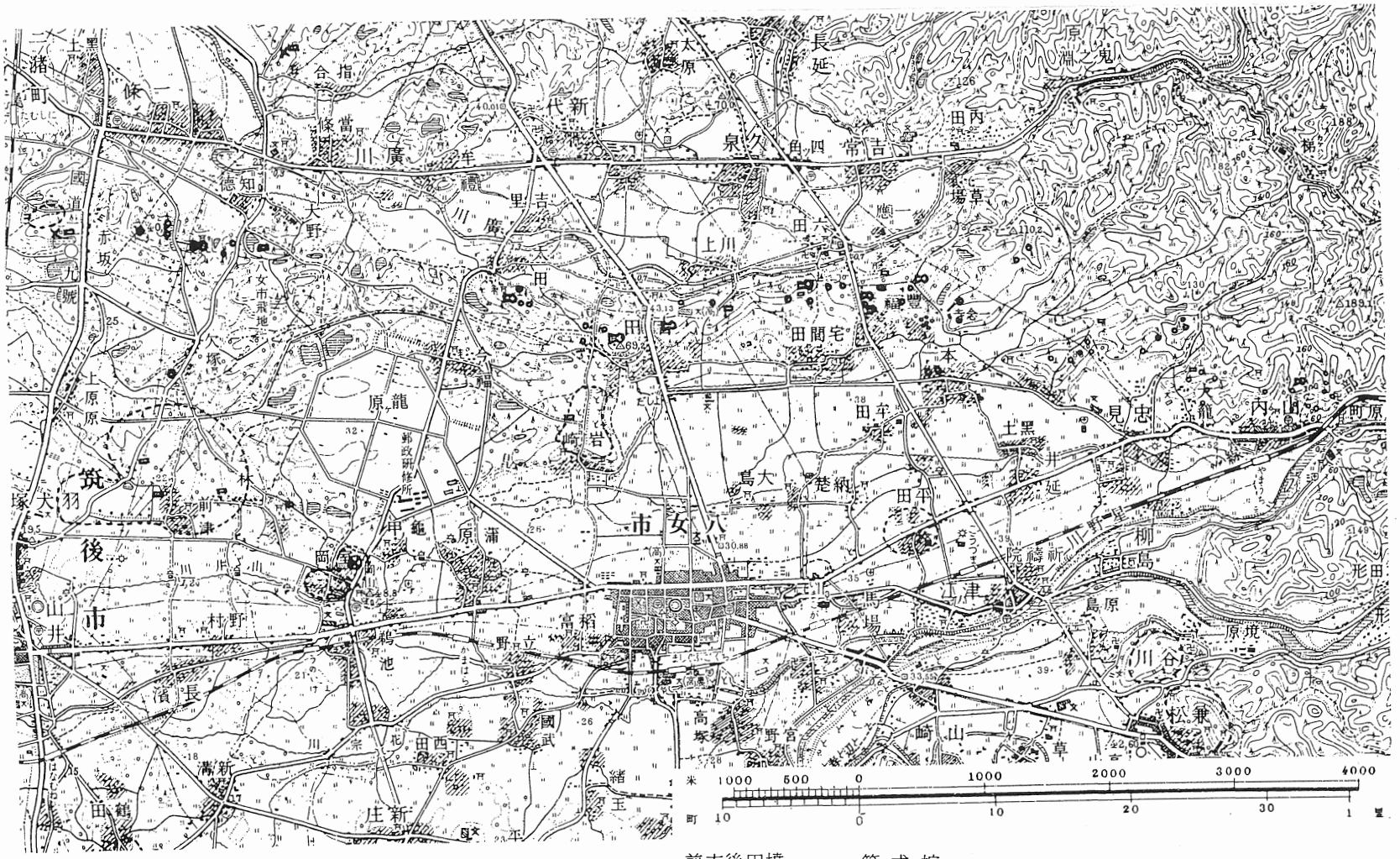
福岡県八女市室岡の弥生遺跡調査概報

1963冬



福岡県八女市教育委員会

1964


八女市
筑後市
亀ノ甲遺跡
前方後円墳
円墳
箱式棺
カメ棺
遺物包含地域
1000 500 0 1000 2000 3000 4000 米
10 0 10 20 30 町

八女市周辺の主要遺跡

刊行にあたって

八女市とその周辺は昔から大陸との交通、交易が盛んで生活文化の発展に大きな形響を及ぼしています。

魏志の倭人伝にみえている耶馬台国の問題、或は秦の始皇帝にまつわる童男山の伝説、市の北方にある巨大な磐井の古墳、その他幾多の史料にそのあとがしのばれます。古代この地方が行政的にも重要な点と線であったことは、多くの歴史研究によって、明かにされているところであります。

昨年のはじめ、亀ノ甲地区の遺跡の緊急調査が実施されたのでありますが、誠に意義深いことといわねばなりません。調査にあたっては、九州大学鏡山教授をはじめ各先生方、福岡学芸大学波多野教授、久留米大学竹重教授など、斯界の権威にお願いしましたが、よく私共の意図を御理解下さって、献身的な調査を賜り、只々感激の外はありません。

更にこのような貴重な報告書の出来ましたことは、関係各位の御熱意と、地元の御協力以外の何物でもないと思います。

意義ある発刊にあたり、総ての人々に衷心より敬意を表する次第であります。

昭和 39 年 1 月

八女市教育委員会教育長
才所徳次

目次

遺跡の発見と調査経過…… 2

遺跡調査の概要…… 3
- Ⅰ. 昭和 37 年度の調査 …… 3
- Ⅱ. 昭和 38 年度の調査 …… 4

遺物…… 12
- Ⅰ. 住居址関係の遺物 …… 13
- Ⅱ. 墳墓関係の遺物 …… 19

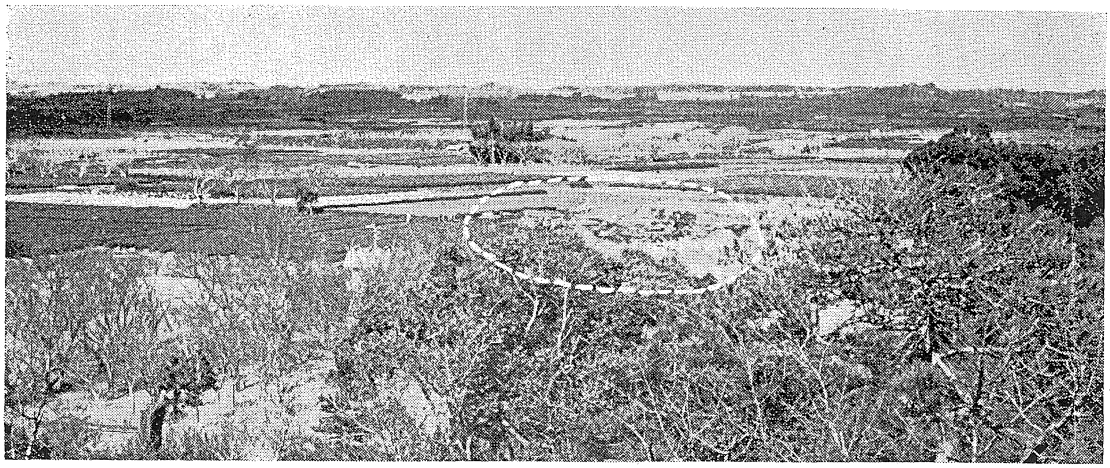
結び…… 21

亀ノ甲遺跡より発掘せる人骨 —特に頭蓋骨について—…… 22

亀ノ甲遺跡墳墓一覧表…… 11〜12

既往の亀ノ甲遺跡関係文献…… 24

遺跡の発見と調査経過



第1図　遺跡遠景（東高地より）

遺跡は国鉄黒木線八女駅の西北3粁余の所にある。水縄山系から別れて、矢部川のつくる平地部の北縁を西へ長くのびた小丘陵上に位置する。弥生遺跡として有名な岩崎遺跡の西約2粁、この地点の南方約0.6粁の地に鵜池の町がある。鵜池から広川に向う開発道路が平地部から室岡台地にかかる最初の切り通しの西側に当っている。

この一帯は古くから甕棺その他弥生式遺物が出土して注目された地域であり、戦時中にも北方の亀ケ原に飛行場が出来、そこへの道路開発の際にも可成りの出土品があったといわれる。

今回の調査の直接の動機となったのは、この切通しの西側の高さ10米余の土地を0.1ヘクタール余切り下げ作業に昭和37年7月頃から取りかかったことにある。たまたまこの現場を岩崎氏が注目する所となり、それ以後同氏の手で発掘調査ならびに資料の整備が進められていた。しかし何分にも広範な地域を発掘することは容易でなく、その間学大学生の応援もあったが協議の結果、一応昭和37年12月までの調査結果の綜合を岩崎氏に依頼し、昭和38年1月17日より23日迄の1週間本格的な調査を県、市および九大考古学教室の協力のもとに実施した。つまり岩崎氏の調査は遺跡の地表面近い上層の調査であり、本年1月の実施はさらに掘り下げ、所によっては3米の深さに達する下層の調査となったわけである。

第2図　雪中の調査風景

地表近い上層の調査は主として住居址の確認と散布土器片の蒐集および埋葬地としての甕棺、石棺、土壙の発掘調査が行われ、下層では前項調査と関係づけながら該遺跡の全容の確認が行われる予定であったが、深部の調査では環溝の一部が発見されたり、重複した石棺、土壙群など相次いで発見されたので、それらの調査および出土遺物の蒐集におわれ予定計画の一部は放棄されねばならない状態であった。　（波多野晥三）

遺　跡　調　査　の　概　要

Ⅰ．昭和37年度の調査

8月18日から21日まで行なった。道路から奥行24米、巾25米の範囲をブルトーザで表土約15糎を剝ぎとったあとに弥生中期の壷片、石鏃片、石棺材などが散在していた。土取りのすすむにつれて石棺、土壙、甕棺等が発見されはじめたので、それら個々の調査記録をつくることにつとめた。しかし、十分調査しないうちに湮滅したものもある。各墳墓については一覧表にまとめたので、そのうち特色ある二、三の甕棺について述べる。

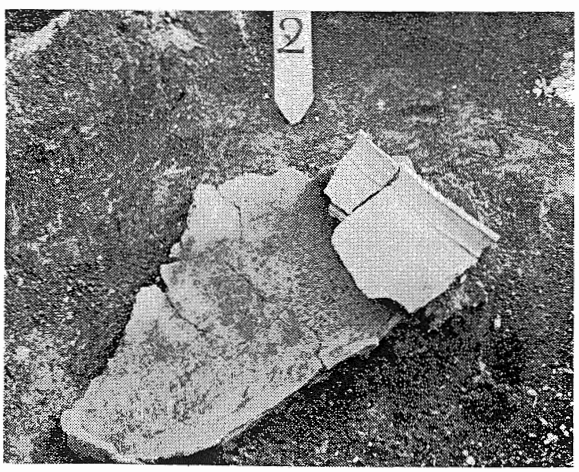
3号石蓋甕棺　傾斜57度で、口縁は典型的な丁字型の須玖式甕棺であった。全長1.15米、口径64糎、底径15糎。表面は明るい赤褐色で肩と胴に断面三角形の突帯がある。内部には女性人骨があり、イモ貝の腕輪が3個ずつ着装されていた。

6号石蓋甕棺　口縁く字型をなし、胴に断面コ字型突帯を有する後期甕棺。口縁に櫛歯平行線文を施し、内部に水銀朱を塗っていた。高さ98糎、口縁径60糎、人骨は頭部が破砕していた。

7号石蓋甕棺　甕の周囲を4枚の緑泥片岩板石で囲んでいた。甕の全長96糎、粗い刷毛目がある。肩に三角形、胴にコ字形の突帯がある後期所属の甕である。

10号石蓋甕棺　本遺跡中、最も深く埋められ、地表下1.65米で蓋石に達した。甕の口径64糎、全長94糎、突帯上には刻目がある。内部には水銀朱が塗ってあった。口縁部の外側の青粘土目貼りの下から素環刀1口が発見された。甕の傾斜に直交する方向で、40度の傾斜をもち、刃を東にむけてあった。

（岩　崎　　光）



第3図　2号甕棺（西新町式）

1集 亀甲遺跡

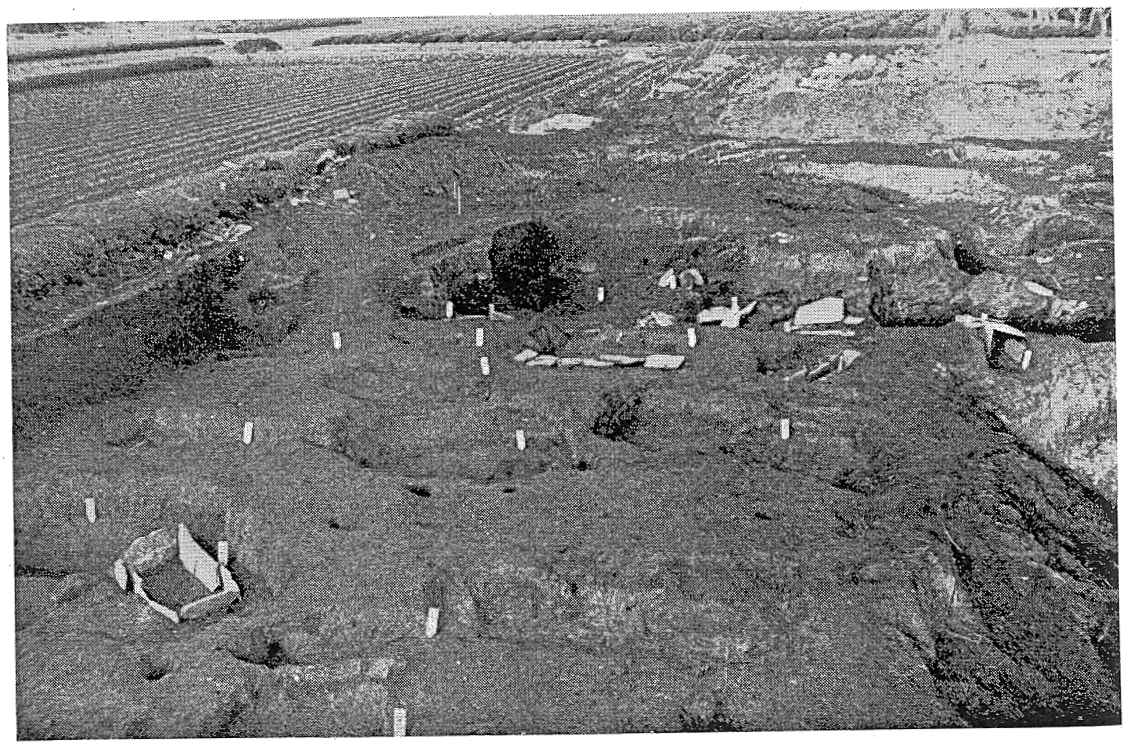
Ⅱ．昭和38年度の調査

亀ノ甲洪積世台地を南北に掘切る道路西側に検出された遺構は住居関係と墳墓に大別され、前者は竪穴と溝（1号）、後者は甕棺、石棺、土壙からなっている。

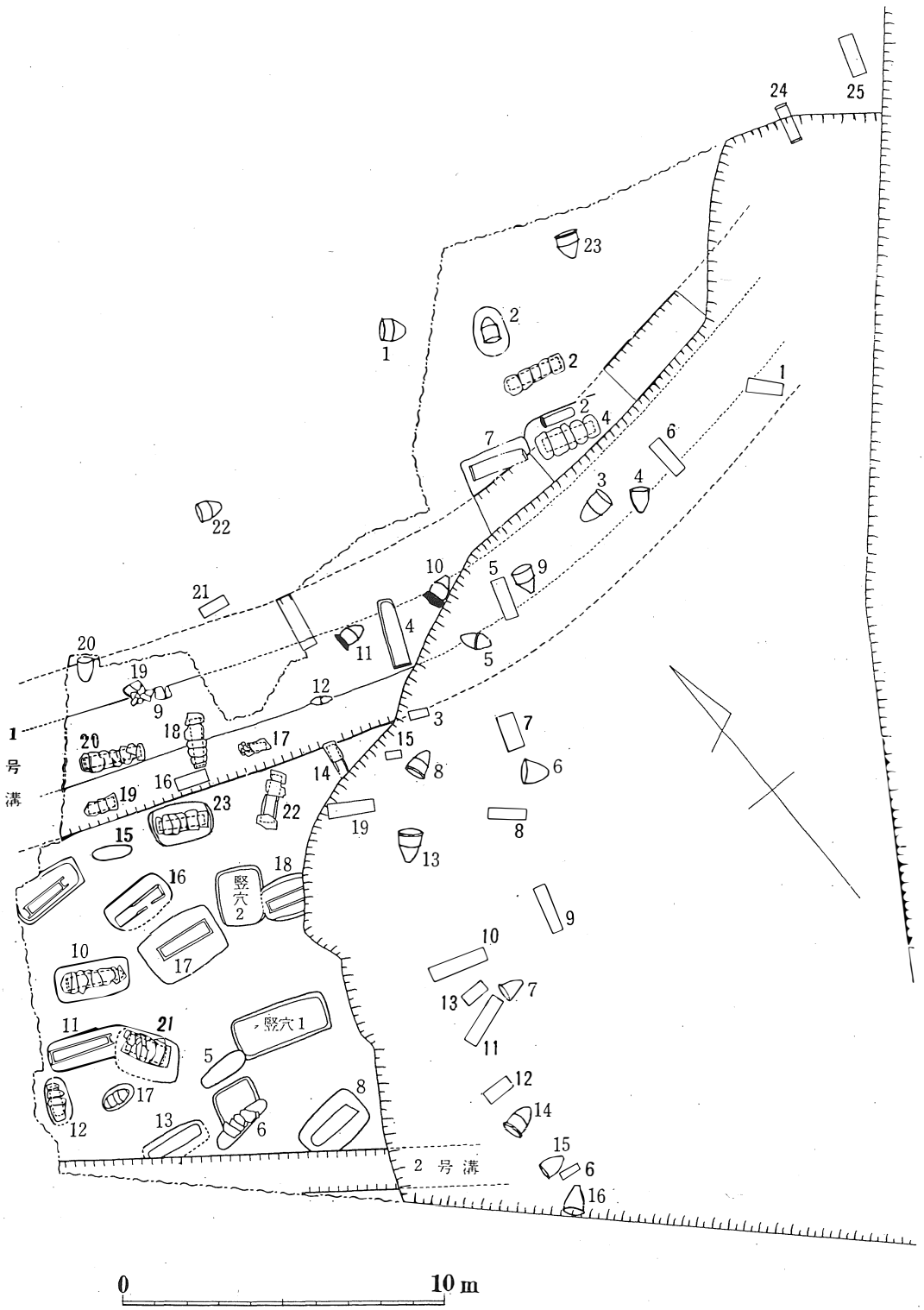
墳墓は調査地区の全面に散在し、溝は調査地区の北寄りに西から北東に向かって弧状に幅5m、深さ2.5mの逆梯形の断面を呈して黄褐色ローム層に掘込まれ、溝底から前期の各種土器が発見された。溝を埋没した黒土中に中～後期の甕棺、石蓋土壙、箱式石棺が埋葬されている事実は溝が短期間で埋没してその機能を失ったらしい事を物語る。溝の南側地区に検出された2個の小竪穴に多数の前～中期弥生式土器片がつみ重なり、黒色の間層を置いて上部に後期土器片が検出された。なお、南の2号溝は後世の掘開で、歴史時代の瓦器が発見されている。

墓は石棺、土壙墓共に東西方位をとるものが多く、次いで南北方位で両方位の中間は少ない。甕棺は各個区間である。しかし各墓間は重複する事は稀で、埋葬に当って以前の埋葬位置を意識して避けている様にも見られる。地表からの埋葬深度は大体一定している様であるが、深浅の差はあり、濠中の墓は深く、この事は濠が完全に埋没して消滅する以前に埋葬が行われた事を示している。墳墓個々については一覧表にまとめたので以下、各墳墓の主なるものについて述べる。

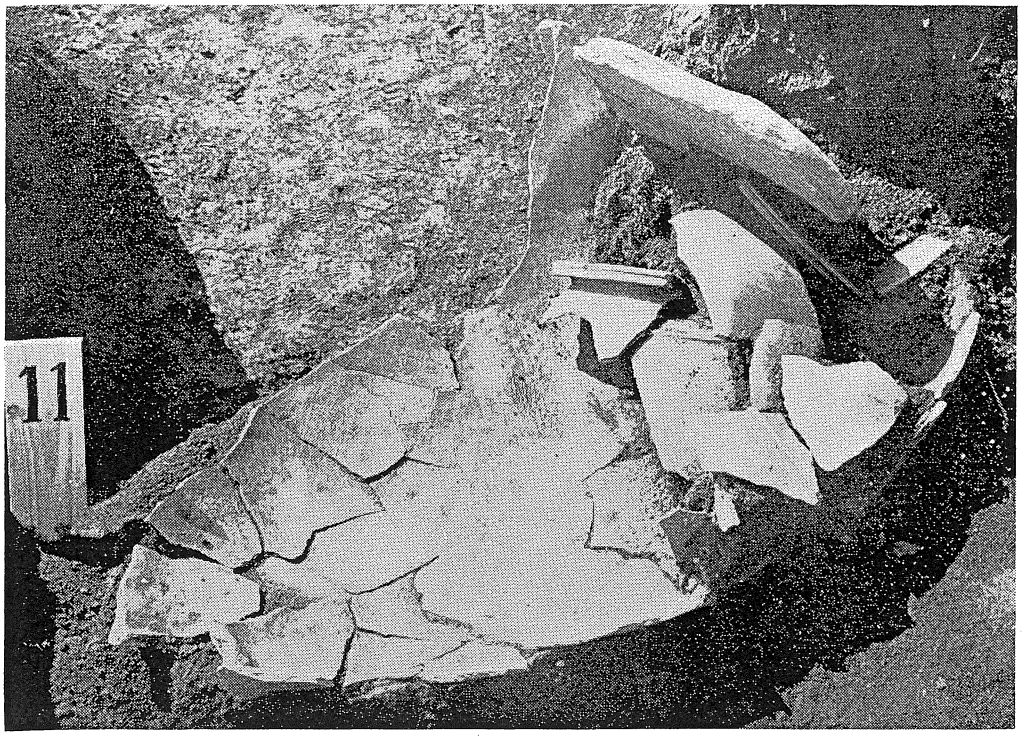
11号石蓋甕棺　遺蹟中央部を区切る溝中に西向きに埋葬された口すぼみの須玖式大甕に平石を以て蓋にした甕棺で溝を埋めた黒土中に埋葬されていたため土壙の状況は不明である。

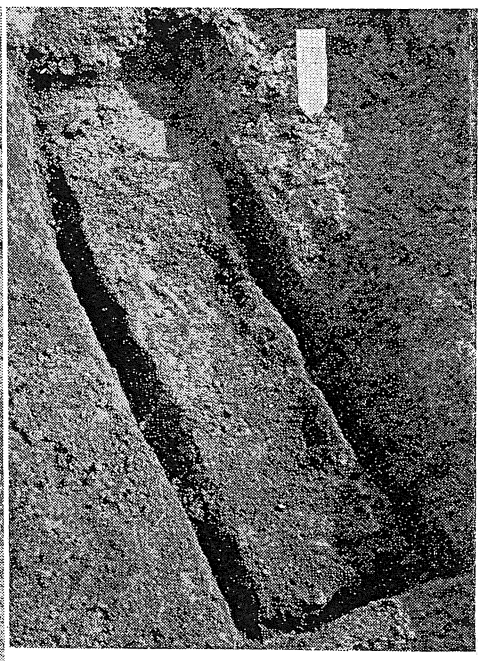


第4図　調査地区全景（南西より）



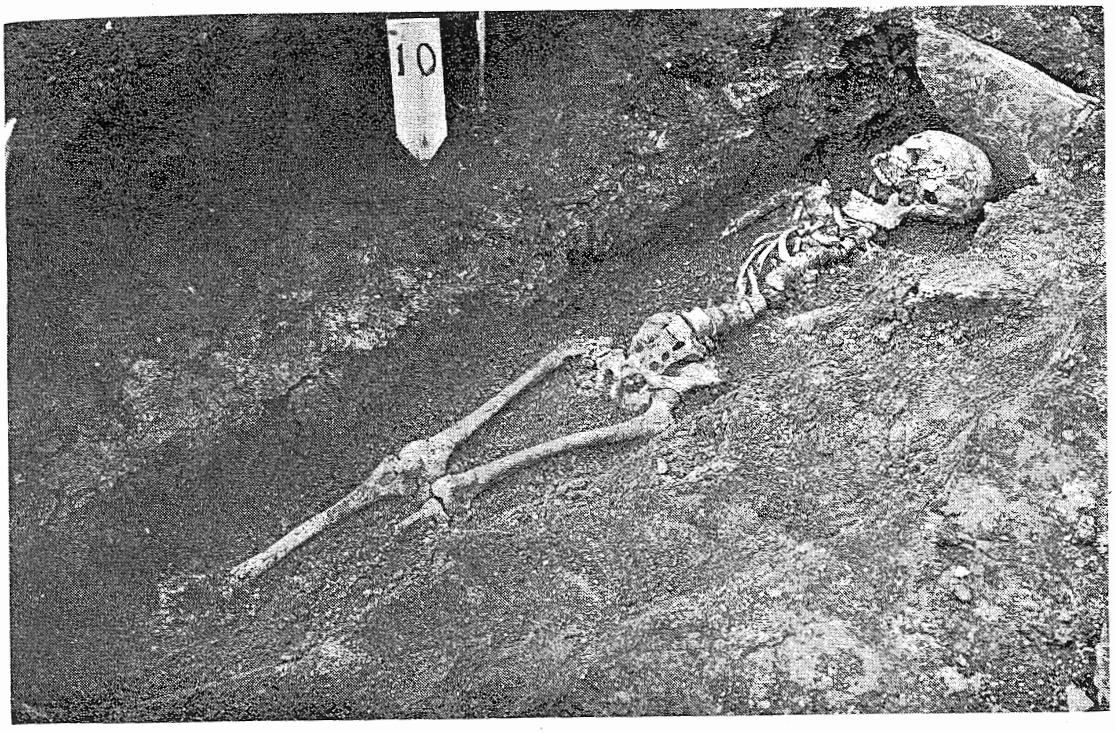
第5図　亀ノ甲遺跡調査地区平面図

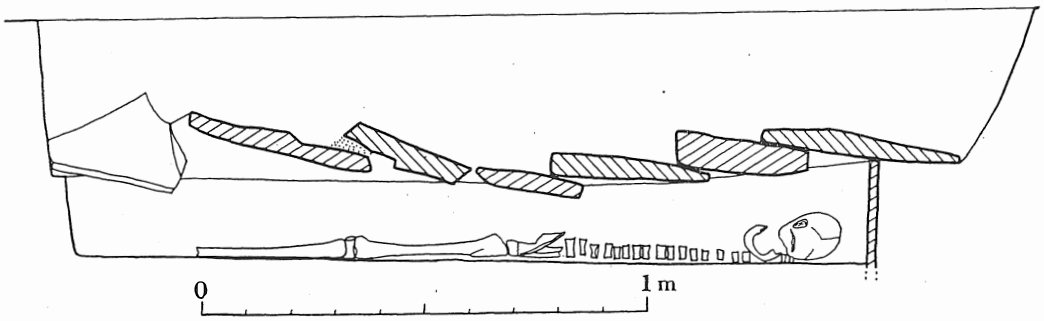


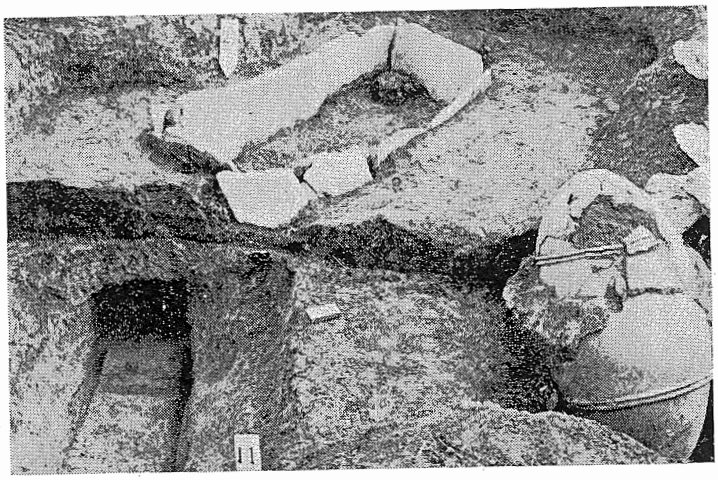


第６図　甕棺と土壙

上　　11号甕棺（石蓋・須玖式）
下左　　14号土壙（組合式木棺）
下右　　17号土壙（同　上）



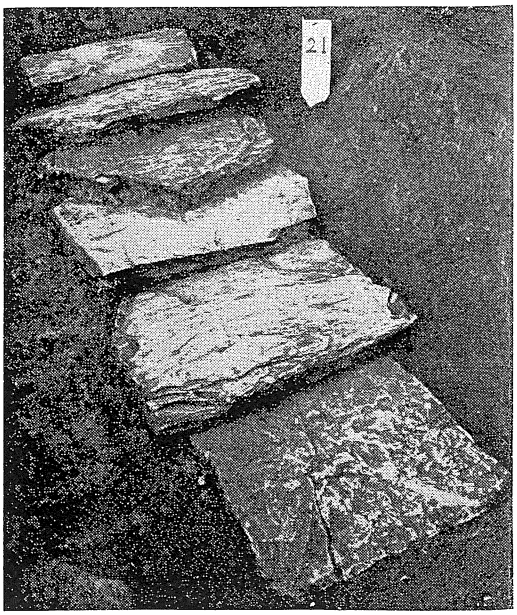




第7図　土壙・石棺・甕棺

上・中　10号土壙

下｛21号石棺、11号土壙
　｛17号甕棺



第 8 図　石棺と人骨出土状況

上　21 号石棺

下左　22 号石棺

下右　23 号石棺

17号甕棺　北向きに48°の傾斜を以て埋葬され、埋葬土壙は甕棺を容れるだけの規模であった。下甕は「く」字型口縁直下の頸部に一条、胴に二条の「コ」字型突帯と、丸味をもつ平底の後期初頭に位置する甕を用い、上甕は同形の甕の肩部以上を打欠き、下甕に被せている。両者の合せ目には灰白色粘土で密閉した後期甕棺である。

11号土壙（組合式木棺）　長方形土壙下部に箱形土壙を持つ二重土壙である。下部の主体は、西に広く東に狭い箱形をなし、一段内側に両側より深く黒土の落込みにより小口が認められ、両側面下部は幅6cmの溝状に黒土が連続し、壙内は黒土が充填しているが、両側面、小口、外側方形土壙の下部平坦面には軟質鉄錆色有機土が一面に認められた。更に東側小口は21号石棺との関係により上部を排土出来ず、内部土壙の延長を追った結果、基盤と同質の土中に上面は断面半円形、下部は両側の延長された平坦な状態が検出された。内部土壙底は基盤上に3cmの粘土を敷き西側に朱が認められた。基盤を追うと内部土壙横断面では逆梯形となるが、両側面では基盤と同質土が壙底より垂直に近く、稍々内傾して基盤との間に充填してあり、小口でも同様の事実が認められた。以上の諸点より推して本土壙は二重土壙の如く見えるが、実際は長方形土壙内に組合された腐蝕し残存せざる材料による構造物を置き、周囲を構造物の上縁の高さ迄掘り上げた基盤土を填めて固定し、上面が緩い半円形断面の蓋を被せ、更に基盤土で埋めた事実が想定される。問題は構造物であるが、以上の如き事実から組合式木棺と考えられ、古墳期の組合長持型石棺を思わせる。棺内には副葬品、遺骸は認められなかったが西側の頭部と考えられる部分に朱が少量認められた点より、他の石棺、土壙と同様に西枕に埋葬されたものと考えられる。本土壙の年代は隣接する17号甕棺と同一面より掘り込まれたらしく、本土壙東端が21号石棺により切られている事実から、21号以前に属し、10号土壙、14号土壙、其他多くの土壙と同一の東西方位をとり、墓地全体古墳期以前の遺物のみ見られ、木棺の用材である大型木板の製作は本遺蹟の後期土器と共に出土した鉄斧其他の利器の使用を考えれば、当然後期の所産と考えられる。

14号土壙（組合式木棺）　黄褐色基盤中に東西方向に営まれた箱形土壙で11号土壙を小形化したものである。蓋は不明であるが、主体部の周囲は基盤が幾分低く掘り下げられている点から腐朽性の板状をなしていたらしい。主体部両側壁は小口より更に外方に延び、この部分は約3cmの厚さに黒土が充填し、主軸に対して両端が軽度の外反を示し、且つ内傾している。両方の小口は両側壁より内側に内傾しながら基盤中に深く立てられた痕跡を示している。壙底は黄褐色粘土が固くしまり、一種の粘土床である。本土壙の壁面が内傾し、側壁の外反する点より考えれば、側壁延長部の厚さは11号より薄く、従って埋葬時土壙中に板を組合せて箱形の棺を作り、周囲に基盤の土を充填し固めた為に内部に空間を有し、撓む事の出来る側板、即ち木板は前述の如き状況なり後に腐朽し消滅しものであろう。以上の如く本土壙も組合木棺であるが、後世の木棺と異り、現地で埋葬に際して石材を組合せて石棺を作ると同様に木板により棺を形成したものと考えられ、材料の違いはあるが、箱式石棺と同一思想により作られたものと言える。

10号石蓋土壙　黄褐色ロームに掘込まれた船形土壙の西端を一枚の平石を立てて固め、成年男性の遺骸

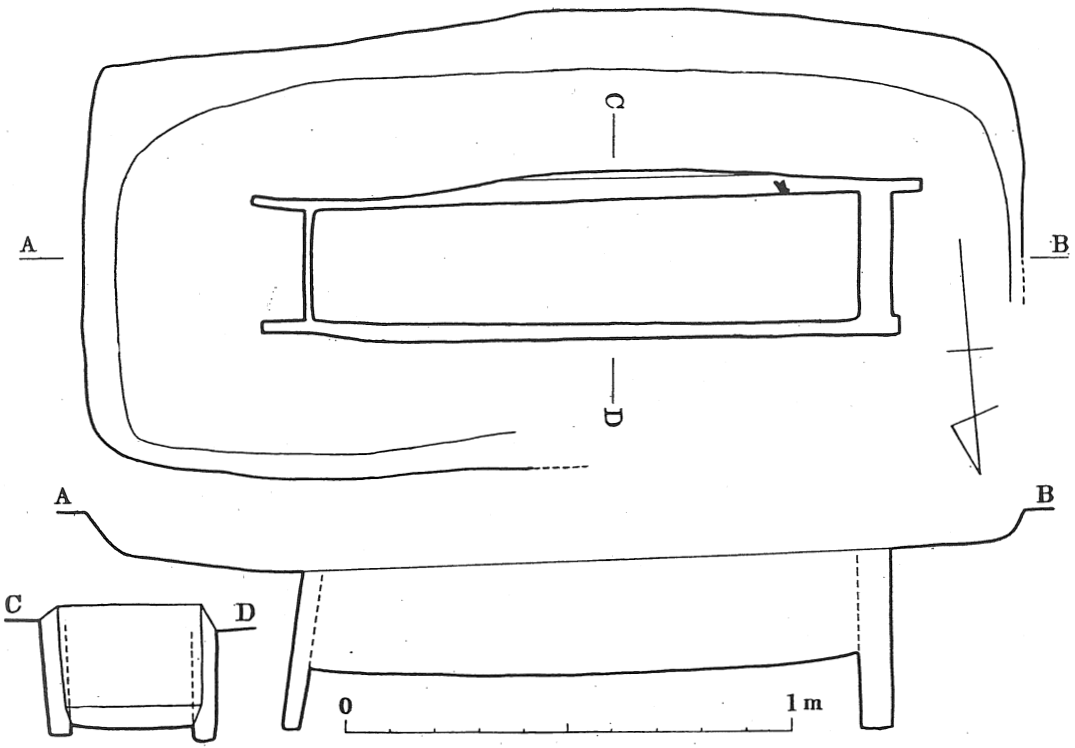
が頭部をこの位置に顔を右向きに仰臥伸展葬され、頭骨に朱が鮮やかに塗附された如くに遺っていた。蓋石は足部から並べて最後に大形の平石で頭を覆っていた。

12号石蓋土壙　南枕に小児遺骸を葬った小形土壙は頭部が方形に足部は円くなる船形土壙で、頭骨が鉄丹と共に遺存した。四枚の片岩質の蓋石は頭部に大きめの石を使い、他は小さい平石を以て遺体を覆っていた。

21号箱式石棺　11号土壙の東隅を切ってこれより浅く埋葬された幅広く短い石棺である。片岩質の石材を多数使用し、石棺東隅に頭骨、西南側壁に沿って長骨（脛骨らしい）が遺存していたが、腐朽甚しく粘土化していた。遺骨の状況から判断すれば、石棺は成人を容れるには短かすぎ、幅の広い点よりして、成人遺骸を左を下に脚を屈した横臥の状態で埋葬したものと考えられる。

23号箱式石棺　片岩の板石を組合せた典型的な石棺で六枚の蓋石下の棺中に両手を下腹で組合せた熟年女性の遺骸が東枕に仰臥伸展葬され、頭部に朱が認められた以外に副葬品は発見されなかった。

（松　岡　　史）



第 9 図　14 号 土 壙（組 合 式 木 棺）実 測 図

亀ノ甲遺跡墳墓一覧表

〔箱式石棺〕

No.	方位	長×幅×深（糎）	備考	No.	方位	長×幅×深（糎）	備考
1	不明	不明		14	N18°W	63以上×30×38	北半遺存
2	N58°W	〃		15	不明	不明	石材散在
3	（西）	〃		16	〃	〃	〃
4	N58°W	$175\times\frac{39}{34}\times40$	丹塗・人骨	17	N52°W	$85\times\frac{29}{20}\times7.5$	小児骨、棺沈下
5	N20°E	$145\times\frac{33}{30}\times31$		18	N24°E	$155\times\frac{42.5}{25}\times12.5$	丹塗、人骨、棺沈下
6	〃	〃		19	N60°W	81.5×35×10	〃
7	（北）	〃	朱塗・人骨	20	〃	$194\times\frac{35}{25}\times9$	〃
8	（北西）	〃	〃	21	S26°E	$140\times\frac{56}{51}\times25$	人骨
9	（北）	〃	〃	22	S49°W	$171\times\frac{42}{23}\times29$	丹塗、人骨
10	N82°W	140以上×48×？	〃	23	S50°E	$163\times\frac{29}{16}\times29$	〃
11	〃	160×42×40		24	不明	不明	不明
12	〃	150×40×37	丹塗・人骨	25	〃	〃	〃
13	（北）	65×？×？	石材散在				

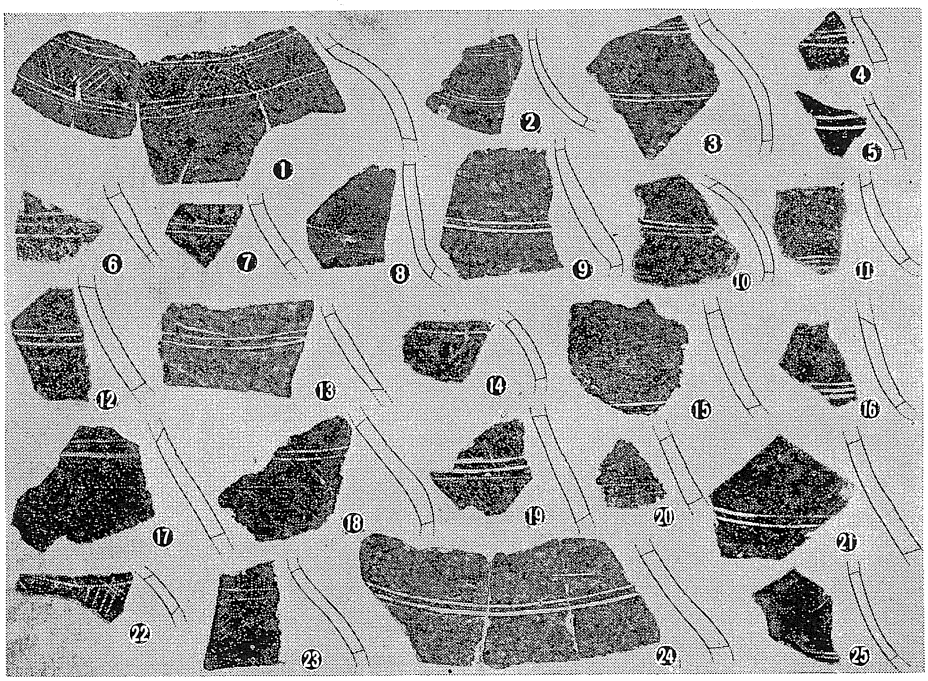
〔土壙墓〕

No.	方位	形状	長×幅×深(糎)	備考	No.	方位	形状	長×幅×深(糎)	備考
1	N12°E	舟形	不明		12	S26°W	石蓋	107×24×19	丹塗、小児骨
2	N58°W	〃	104×33×19	側石使用	13	N79°W	〃	$186\times\frac{46}{33}\times27$	側石使用
3	N86°W	〃	74×30×？		14	N86°W	組合木棺	$124\times\frac{29}{25}\times26$	
4	W21°S	石蓋	213×48×48	側石、丹塗、人骨	15	N64°W	舟形	135×40×33	木蓋？
5	S83°W	〃	83×25×11		16	S85°E	組合木棺	$165\times\frac{36}{35}\times29$	
6	S86°W	〃	213×44×25	丹塗、人骨	17	E9°S	〃	$175\times\frac{50}{43}\times15$	丹塗、人骨
7	N69°W	組合木棺	$178\times\frac{52}{44}\times12$以上	〃	18	N67°W	〃	125以上×$\frac{40}{35}\times39$	〃
8	N83°E	石蓋	$149\times\frac{37}{28}\times19$		19	N51°W	舟形	94×27×？	
9	N63°W	〃	不明		20	N76°W	長方形	170×43×？	
10	N60°W	〃	182×36×24	側石、丹塗人骨	21	N85°W	石蓋	93×31×18	
11	N66°W	組合木棺	$182\times\frac{47}{33}\times26$						

〔甕　　棺〕

No.	方　位	形　状	時　期	傾斜	備　考	No.	方　位	形　状	時　期	傾斜	備　考
1	不　明	不　明	不　明	不明		11	W 7°S	石蓋（単）	須玖式	（水平）	
2	S25°W	被　蓋　式	西新町式	40°		12	N61°W	合　口	後　期	15°	小児骨
3	不　明	石蓋（単）	須　玖	57°	貝　輪　6	13	E30°N	石蓋（単）	須玖式	43°	
4	〃	不　明	不　明	不明		14	W	単	不　明	18°	
5	〃	〃	〃	〃		15	不　明	不　明	〃	不明	
6	〃	石蓋（単）	後　期	〃		16	（南　西）	直立（単）	〃	（直立）	
7	N42°W	石囲、石蓋	〃	83°		17	N 7°E	被　蓋　式	後　期	48°	
8	不　明	不　明	不　明	不明		18	（西）	〃	不　明	80°	
9	N28°W	合　口	後　期	32°		19	不　明	側置（単）	須玖式	43°	
10	N77°W	石蓋（単）	〃	46°	素環刀　1	20	〃	単	〃	不明	

遺　　物



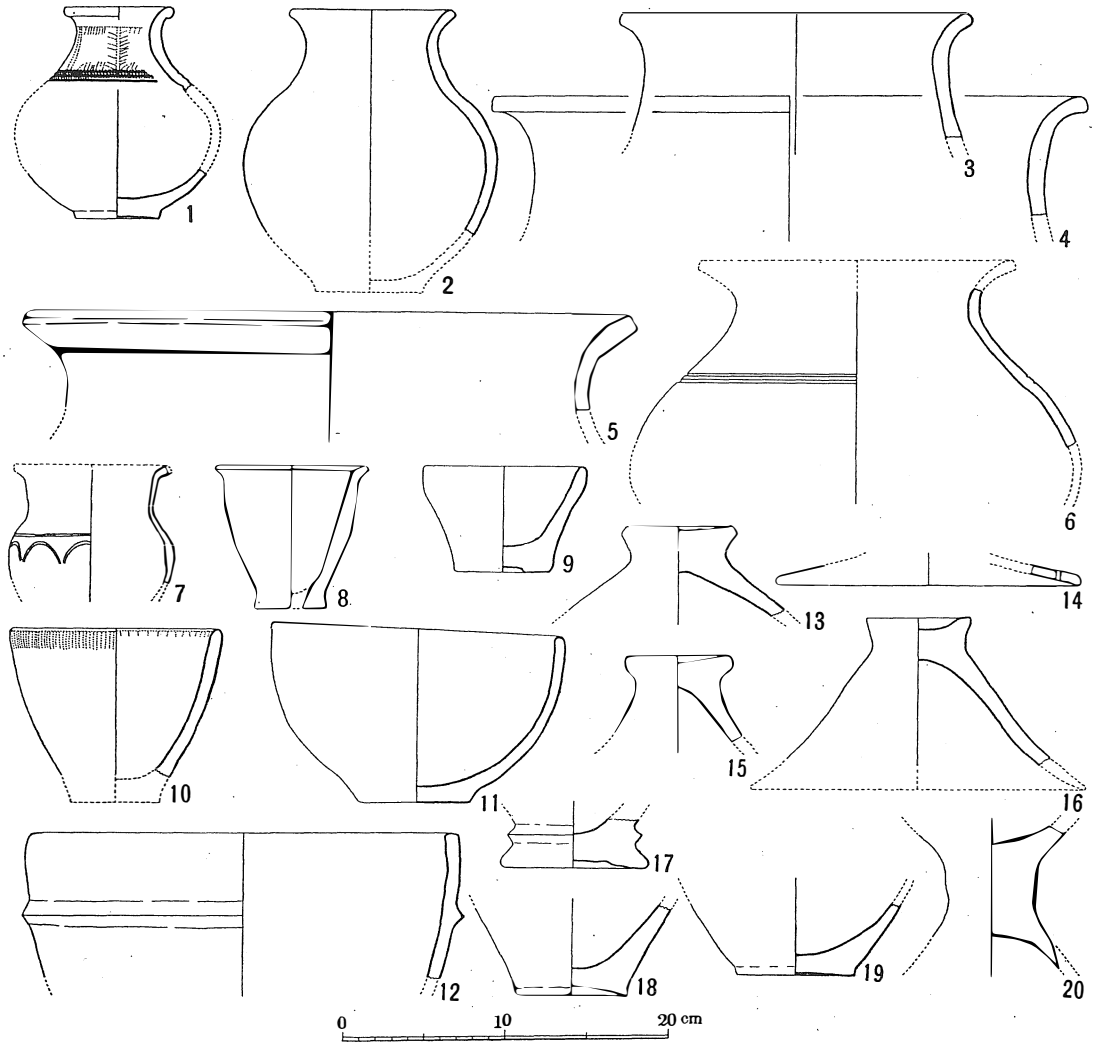
第 10 図　　1 号溝内発見壺形土器片文様拓影（¼大）

Ⅰ．住居址関係の遺物

弥生式土器、石器、鉄器の別があるが、なかでも土器は1号溝内とその南地区1号竪穴のものでは時期的に若干のずれが認められる。

（1）弥生式土器（1号溝内）（第10～13図）

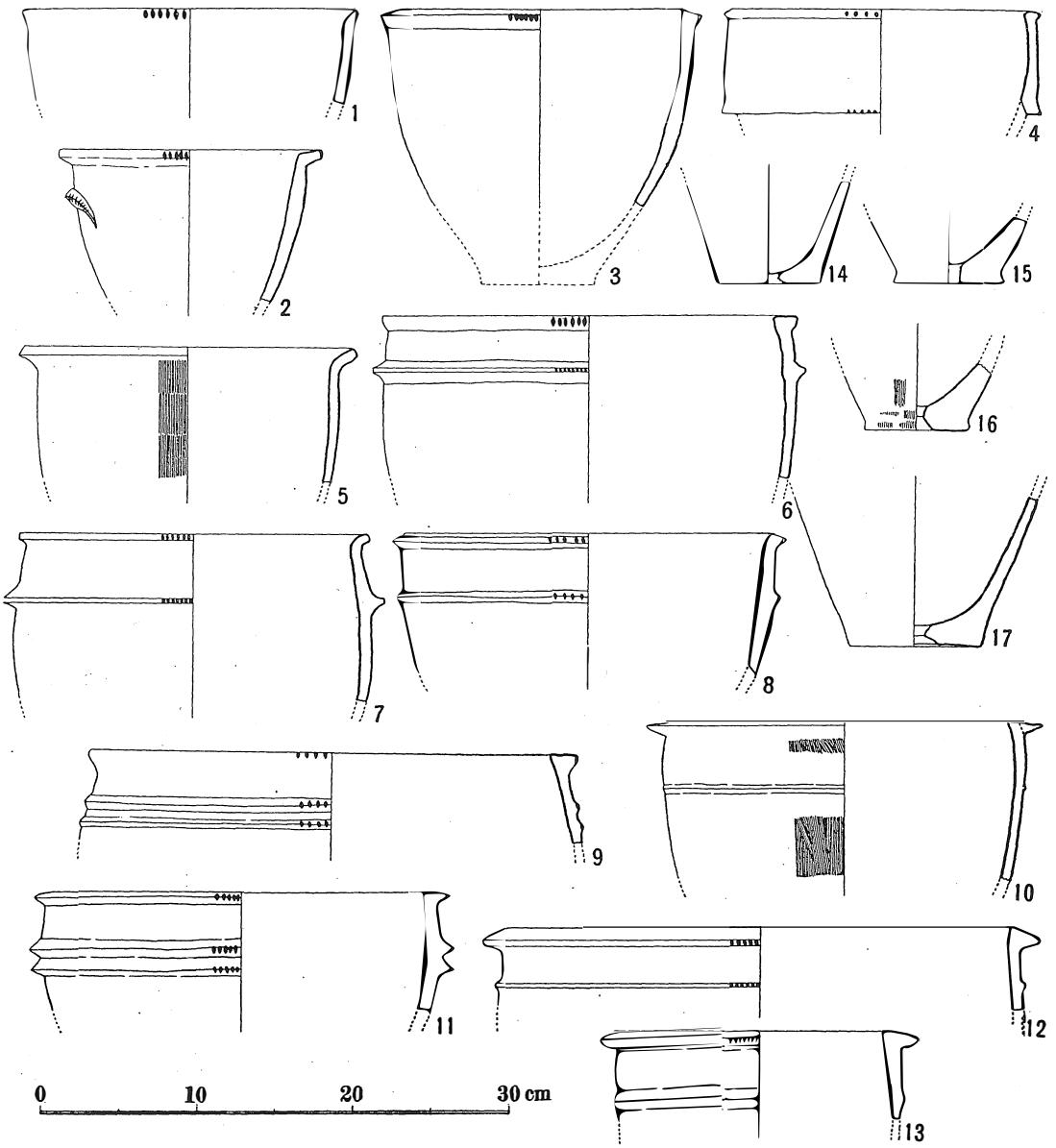
壺形土器は三種ある。**A**（第11図1）球形胴に上すぼみの頸がつき、口縁は断面蒲鉾形をなして厚くわずかに外彎している。底は円盤状に厚い。頸部に赤色彩文がある。頸と肩の境は明瞭でない。**B**（第11図2～4・6）頸部の発達に著しいものがあり、器高の延びと共に胴張りも誇張されてくる。厚みは頸から外彎する口縁まで均一さを示している。**C**（第11図5）頸部から口縁に至る外彎が大きくなり、口縁の外側に平たく幅広い肥厚部がある。総じて壷の容量はA、B、Cの順に大きくなり、燈色を呈する表面はよく研磨



第11図　1号溝内出土土器実測図(一)

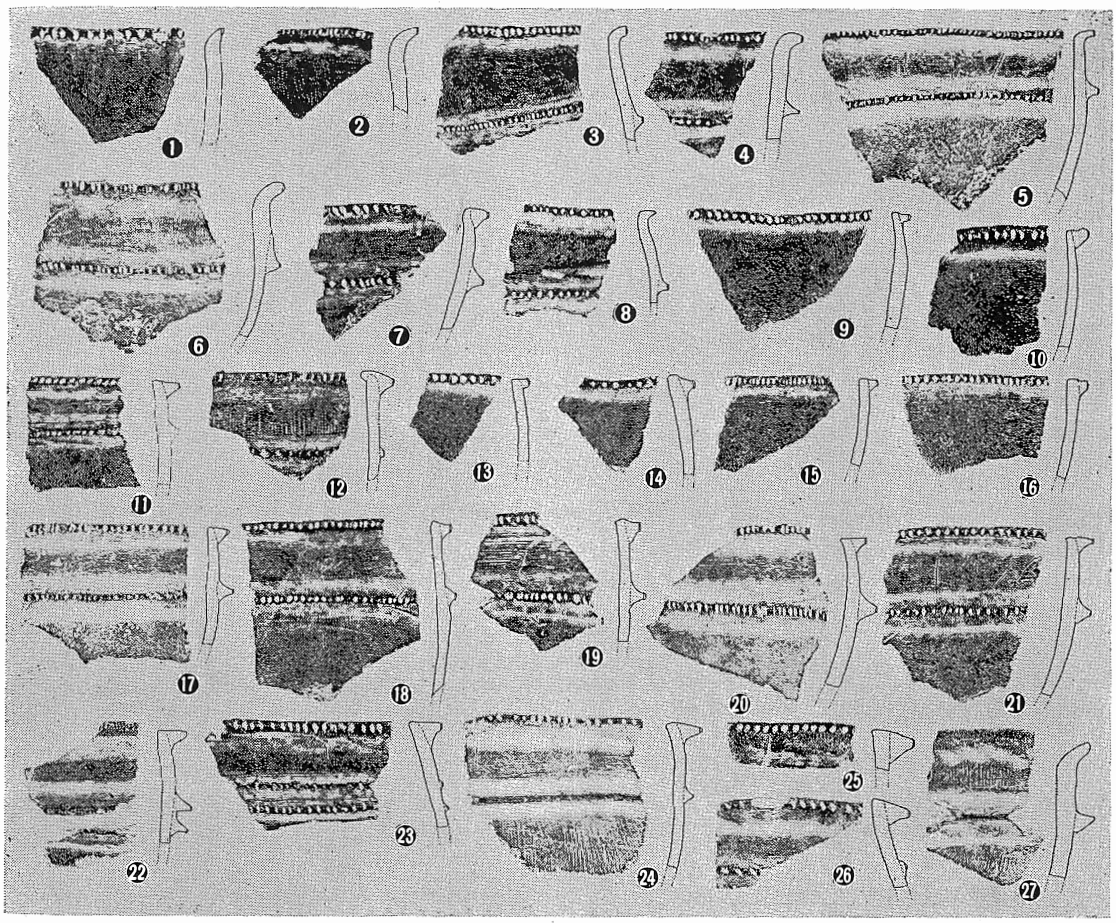
されて美しい。B、C類では肩部に箆がき平行線を施すものが通有であったと思われる（第10図）。まれに弧文（第11図7）、重線山形文（第10図1・22）がある。B、C類ではA類に較べて口縁の外彎製作や施文の手法に稚拙さがただよっている。A類は板付Ⅰ式の手法をかなり残しており、B、C類には板付Ⅱ式の特徴を認めることができる。出土量からみて主体をなすものはB、次いでC類であり、A類はごく若干である。

甕形土器は量的に最も多く、煤の附着したものや火にあって変色したものがかなりみられる。口縁部附近の形態から四種に分類できる。**A**（第12図1、第13図1）黒褐色の表面がよく研磨されて直口に近い。わずかに外彎する口唇部は先端がとがり外側にやや粗い刻み目がある。**B**（第12図2・5・7、第13図2～6）



第12図　1号溝内出土土器実測図(一)

口縁の外彎が明瞭になり厚みも一様さを保っている。胴張りは殆んどなく、やや細かな刻み目が先端に加えられる。 また口縁下3cmぐらいに刻み目ある粘土帯を貼りつけたもの（第13図3～6）、 粘土帯より口縁までの間を一段厚く仕上げたもの（第13図6）などがある。 **C**（第12図3・4・6・8・9・11～13、 第13図7～23・25・26） 直口またはやや内彎する口縁の上端外面に刻み目ある粘土帯を貼りつけて、 断面の上面を水平あるいはやや外下りに仕上げたもの。口縁の少し下にも一条、まれに二条の刻み目ある粘土帯をめぐらす。貼土の手法に指先による未熟な仕上げをあからさまに残した稚拙さが共通してみられる。それでもなかには若干ながら口縁上面の水ひきを入念にしたすぐれた仕上げを示すものがあり、その場合には粘土帯の接着部が厚くつくられ、上面が外下りで一見「城ノ越式」に接近するようなややすぐれた感覚をみることができる（第12図12、第13図25・26）。 これらは明褐色で、他の多くが煤けた黒っぽいものであるのと対照的である点、炊事用としてよりも貯蔵用としての機能があるのではなかろうか。**D**（第12図10、第13図24） 明褐色、薄手の製作で表面に刷毛目調整がみられる。口縁とその下に粘土帯をめぐらし、水平口縁をつくる点ではC類と同様であるが、焼成、粘土帯の仕上げなどに一層洗練された精巧さをみることができる。中期の土器にみるような規格化された造形への接近が予想できよう。以上の分類によるもののうち、最も多いのはC類であって、B類が次ぎ、A、D類は一、 二点にしかすぎない。 B、C類は壷形



第13図　1号溝内発見甕形土器片文様拓影（¼大）

B、C類にも対応するもので板付Ⅱ式、A類は壷形A類に対応する板付Ⅰ式、D類は板付Ⅱ～Ⅲ式の過程のなかに求められるものである。またB、C類に属するとみられる底部（第12図14～17）には整作過程で穿孔されたもの（16・17）とその後に穿孔して甑に転用したもの（14・15）がある。

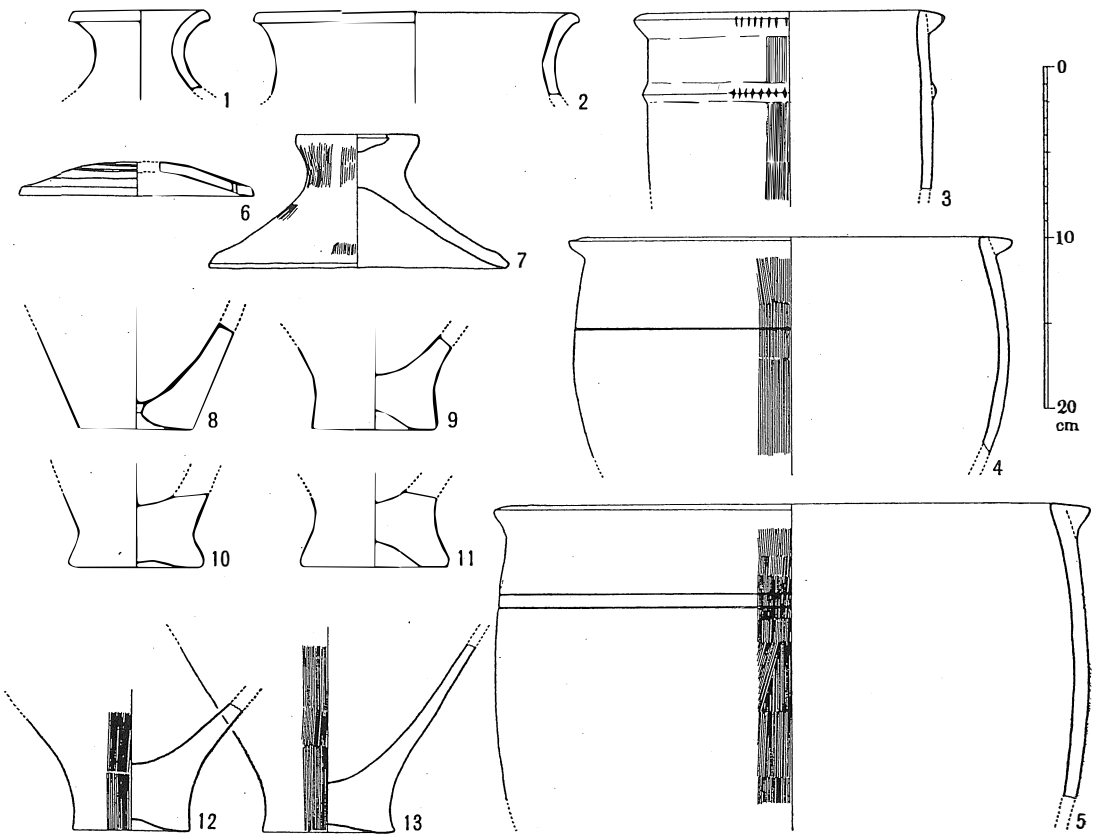
鉢形土器（第11図8～12）には図示したような五種の形態がある。いずれも各一個体にすぎない。そのうち10は口縁下の内外両面に赤色彩色があり、焼成、仕上げに壷形A類に対応するところがある。他の四種は壷形B、C類に組みあうものであろう。

蓋形土器（第11図13～16）深皿形を逆にしたような通有のものである。黄色で表面研磨されている。板付Ⅱ～Ⅲ式土器相当であろう。但し、14は丹塗り薄手の扁平な形で中期に伴なうもので墳墓関係の混入であろうか。

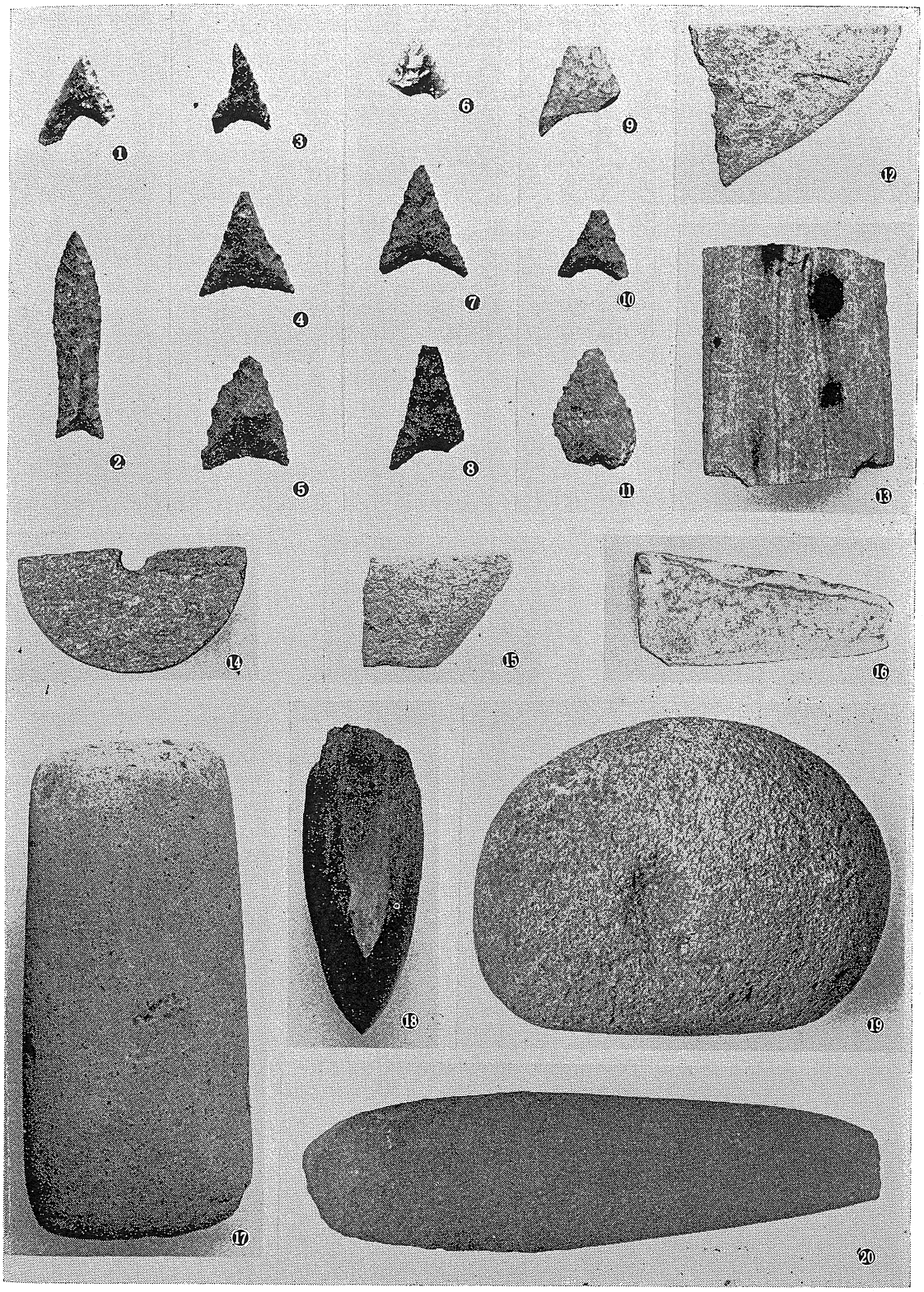
このほかにも器形不詳のもの若干があるが、以上の資料によって、1号溝で囲まれた北側地区に板付Ⅰ式終末頃から板付Ⅱ式の時期を主体とする前期集落のあったことが知られる。

（2）弥生式土器（南地区1号竪穴）（第14図）

一部に混入があるが、竪穴に所属すると思われる土器は1号溝内のものと対比して示せば、壷形のB、C類、甕形のC、D類に相当する。ここでは壷形は乏しく、甕形のC、D類相当土器が主体をなすと思わ



第14図　1号竪穴出土土器実測図



第15図　亀ノ甲遺跡発見石器

れる。D類では刷毛目調整が主流となり、淡黄色を呈する器体は薄手に洗煉されて突出する水平口縁をもち、その下に一、二条の篦描横線文がみられる。底部は上げ底が多い。本竪穴の土器は板付Ⅱ～Ⅲ式に相当するものであり、Ⅲ式の占める比重が大きい。

（3）石　器（第15図）

石鏃（1～8）阿蘇系黒耀石2箇（1・6）と玄武岩6箇の計八例ある。いずれも打製で形態に二種ある。二等辺三角形で底辺が内彎するもの（長さ1.7～3.2cm）、細長い柳葉形のもの（2—長さ5cm）で、前者のうち1はくりこみが著しい。1～5は1号溝内、6～8は南地区黒土中の発見。このほかに37年度発見品が5箇ある。

石庖丁（12・15）外彎刃の非常にうすい破片である。結晶片岩製。1号竪穴発見。37年度発見品にも一箇ある。

紡錘車（14）半欠品であるが径5.2cm、厚さ0.4cmである。結晶片岩製。1号溝内発見。なお37年度発見品のなかに石製、土製のもの各一箇がある。

石剣（13）磨製。関の部分で刃の大部分と茎も欠けている。所謂鉄剣形で、刃幅4.1cm、中央に鎬が通り断面菱形をなし厚み1cm。粘板岩質頁岩。1号竪穴発見。

石斧（17・18・20）17は福岡市今山系の玄武岩製で全長15.7cm、幅7.4cm、厚み4.2cm。全体の風化が著しいが使用による刃こぼれのあったことがうかがわれる。18は幅約5cm、厚み3.9cmの磨製蛤刃残欠で片麻岩製。20は硬砂岩製でハンマー状の形態をとり、全長20.5cm。一方は磨かれて先端が刃をなし、他方は円棒状で敲打のままである。表面が赤く焼けている。17・20は1号溝内、18は南地区発見。

凹石（19）隋円形（14×11cm）の両面に小凹みがある。厚さ7cm。安山岩製。南地区発見。

管玉　昭和37年度発見品。濃緑色の碧玉製で長さ3cm、径1cm。径0.3cmの穿孔は両ぐりである。

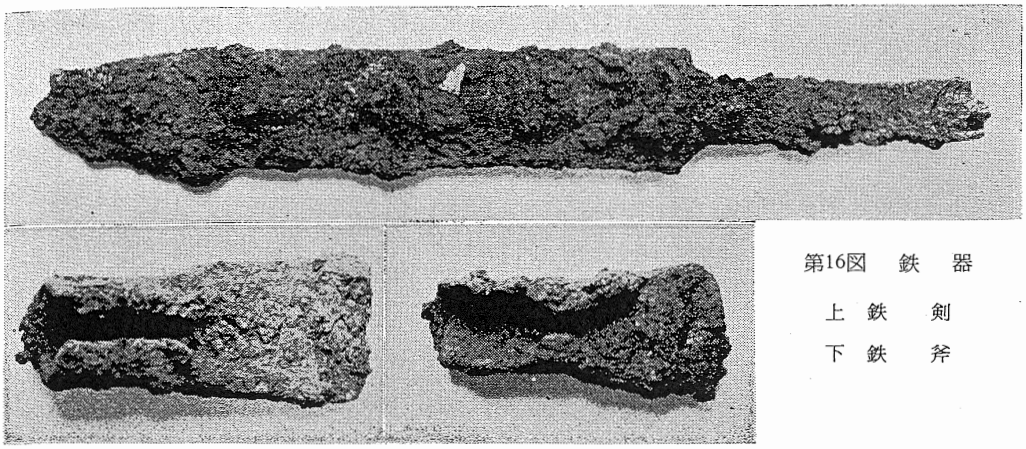
（4）鉄　器（第16図）

鉄剣　一口。全長20.5cm、刃幅2.7cm、厚さ0.7cm。南地区発見。

鉄斧　大小二箇ある。大は長さ7.6cm、両端を曲げて袋部をつくる。刃幅3cm。5号土壙東出土。小は長さ6.4cm、刃幅2.8cm。14号土壙北出土。

以上の鉄器はいずれも黒土中に単独で発見されたものであるが、あるいは墳墓に所属する棺外副葬品であろうか。

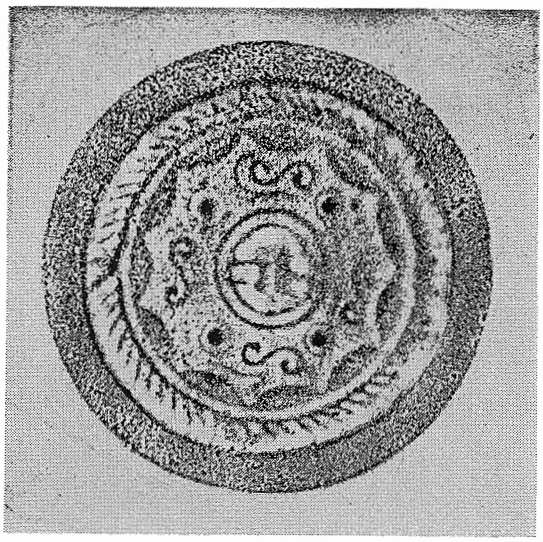
（小田富士雄）



第16図　鉄　器
上　鉄　剣
下　鉄　斧

Ⅱ．墳墓関係の遺物

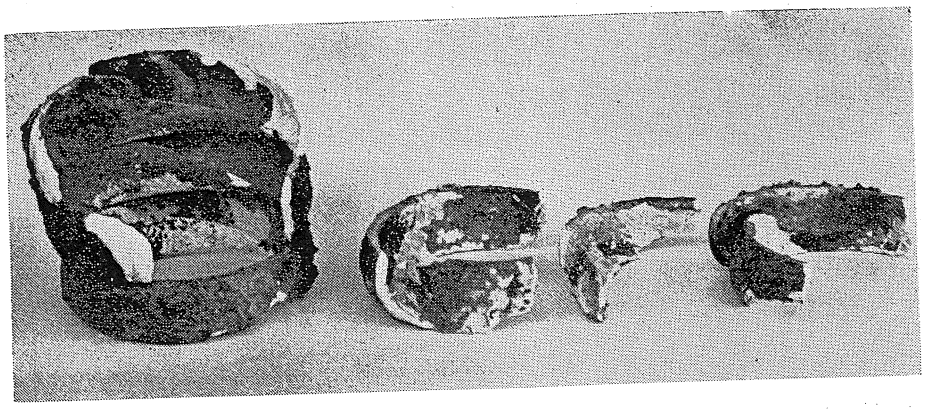
内行花文仿製鏡　一面。昭和30年１月27日に箱式石棺から発見された。今回の調査中に当時の関係者について尋ね、石棺は東西方向をとって比較的地表下浅く発見された。場所は21号石棺附近であったという。本鏡はすでに梅原博士の著書にも紹介されているが、鏡の径は9.4cm、鋳上りはよい方で、平縁の端などは磨滅の跡がなく鋭い。背面は捩れのある櫛目文の内側に十一弧の内行花文、四乳、四箇のＳ字文があり、紐を二重圏で巻いている。文様構成の上に漢代四虺文鏡の影響を認めることができよう。弥生時代の四虺文鏡は佐賀県三津永田の後期甕棺発見例がある。



第 17 図　昭 和 30 年 発 見 の 仿 製 鏡

（本資料は発見後、県立八女高校に保管されていたが現在行方不明となった。本書所掲の写真、拓影、実測図は昭和30年２月に作成していたものである。）

貝輪　６箇。昭和37年度３号甕棺発見品。イモガイを横に輪切りしたもので、被葬者の両腕に３箇ずつ着装されていたらしい。一方の３箇は現在もなお接着したままである。直径７cm、厚み２cm。一般に弥生時代のイモガイ製貝輪は女性用品といわれている。



第18図　貝　　輪（3号カメ棺）

素環頭鉄刀　一口。昭和37年度10号甕棺外発見。環頭の径3cm、長さ30cm、幅2.5cm。後期甕棺に伴う環刀としては佐賀県三津永田の例がある。（本品は原田大六氏の手元で整理中である。）

石鏃（第16図9～11）　形態は1号溝中の諸例と似たもので、玄武岩製である。9は6号土壙、10は8号土壙、11は13号土壙の中から発見された。但し、副葬品とするよりは住居址関係のものと考うべきであろうか。

（小田富士雄）

結　　び

亀ノ甲遺跡の範囲は今回までの発掘調査区域よりも更に広大である。その全貌が知られるまでには今後再三にわたる調査がのぞまれる。今回の調査によって下層に弥生前期の集落と上層に弥生中～後期の墳墓群の存在が明らかになった。下層調査では筑後ではじめて板付Ⅰ式文化の伝播が立証され、板付Ⅱ式文化の繁栄していたことが知られた。その甕形土器に強く残された縄文系土器の伝統はこの遺物の特色ともいうべきもので、福岡県板付遺跡(1)、長崎県原山Ｃ遺跡(2)、熊本県斉藤山遺跡(3)、鹿児島県高橋貝塚(4)、更には東九州地方に分布する下城式土器(5)などとの不可離な関連を指摘することができる。農耕文化の形成に八女地方が歩んだ過程は今後これらの資料を比較分析することによって知ることができよう。

上層では墳墓群と交替し、箱式石棺、甕棺、石蓋土壙などが群集墳を構成しているが、注目すべきは土中に設けられた組合式木棺の痕跡を明瞭にしたことであろう。その存在については予想されていたけれども、確実に中～後期のうちに存在していることを認めえたのは貴重な成果であった。また、後期のうちに仿製鏡の存在を明らかにし、佐賀県三津永田遺跡(6)について鉄製素環刀の副葬例を追加しえたことも明記さるべき成果であった。弥生中～後期には筑後川以北の北九州地域と同様な墳墓の在り方を示していることもあらためて知られた次第である。次期古墳文化形成以前のこの地方墳墓を研究することは今後更に継続せねばならない課題である。

（小田富士雄）

註　(1)　森貞次郎・岡崎敬「福岡県板付遺跡」（日本農耕文化の生成）1961.

(2)　森貞次郎「原山遺跡」（九州考古学14）1962.

(3)　乙益重隆「熊本県斉藤山遺跡」（註1前出）

(4)　河口貞徳「鹿児島県高橋貝塚発掘概報」（九州考古学18）1963.

(5)　小田富士雄「下城式土器考」（白潟遺跡）1958.

(6)　金関丈夫・坪井清足・金関恕「佐賀県三津永田遺跡」（註1前出）

亀ノ甲遺跡より発掘せる人骨

—特に頭蓋骨について—

室岡にて発掘され、復元された弥生式時代人骨群の主な特徴を要約すると、

（1）No. 1 の頭蓋骨（男性）

頭蓋骨は非常に頑強で大きく、その最大長（197.2mm）、最大幅（143.5mm）は特に長く、最大高（136.2mm）は中等度の長さを有する。それ故、その形は長幅示数に於て長頭を、長高示数に於て低型を示している。

（2）No. 2 の頭蓋骨（男性）

No. 1 の頭蓋骨同様極めて頑強で大きく、その最大長（196.5mm）、最大幅（141.6mm）は長く、最大高（142.3mm）も長い。それ故、その形は長幅示数に於て長頭を、長高示数に於て正型を示している。

（3）No. 3 の頭蓋骨（男性）

No. 1、No. 2 に比べると骨質も弱く、形も小さいが最大幅（138.4mm）の短いのに比して最大長（181.5mm）は長く、最大高（140.0mm）も長い。それ故、その形は長幅示数に於て中頭を、長高示数に於て高型を示している。

（4）No. 4 の頭蓋骨（女性）

頭蓋骨は骨質も弱くて小さく、最大長（181.5mm）、最大高（133.0mm）は中等度の長さを呈し、最大幅（138.2mm）は短い。それ故、その形は長幅示数に於て中頭を長高示数に於て正型を示している。

（5）No. 5 の頭蓋骨（女性）

No. 4 同様骨質も弱くて小さく、その最大長（175.4mm）最大幅（135.1mm）は短く、最大高（436.8mm）は中等度の長さを有する。それ故、その形は長幅示数に於て中頭を、長高示数に於て高型を示している。

（6）No. 6 の頭蓋骨（女性）

No. 5 の頭蓋骨と類似している。

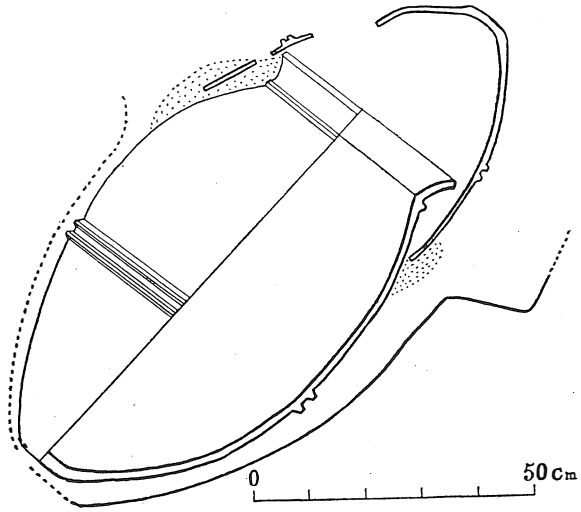
（7）以上の頭蓋骨から室岡人骨群は男性に於て長頭型を呈する傾向が見られるが、長高示数は一定しない様である。一方、女性に於ては何れも中頭型を呈し、男性同様長高示数は一定した数値を有しない様である。尚、歯牙の咬耗度がいづれも Bsoca の 1～2 度を呈する事から、当時代若くして（壮年～熟年）

第 19 図　　頭蓋骨出土状態（左　10号土壙、右　22号石棺）

死亡している様な傾向が推思され。

（8）室岡人骨群を古代人骨、現代近隣人と比較すると、熊本県御領人骨、八女郡吉田、高江発掘の人骨と類似した数値を呈し、現代人よりは大なる数値を示している様である。

久留米大学医学部　第一解剖学教室
竹　　重　　順　　夫



第20図　17号甕棺出土状況断面図

〔既往の亀ノ甲遺跡関係文献〕

梅原　末治　「上古初期の仿製鏡」（読史会創立五十年記念「国史論集」）1960

岩崎　　光　「八女市室岡弥生遺跡中間報告」（八女史学1号）1962

竹重順夫、宮崎道雄、伴文夫、秦洋一、田中瑞穂、西村四郎、光木一仁、佐藤定人　「福岡県亀甲弥生遺跡発掘人骨群の頭骸骨に就いて」（久留米医学会雑誌26巻3・4号）1963

あ　と　が　き

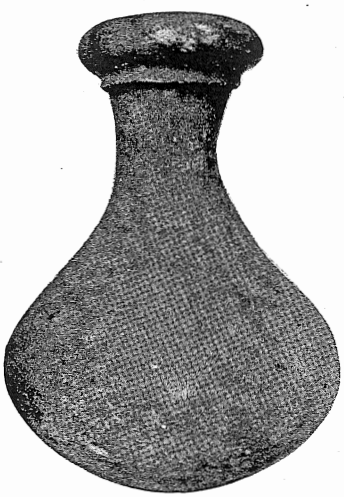
本文は波多野晥三、岩崎光、松岡史、小田富士雄、竹重順夫の分担執筆にかかるもので、相互の連絡と編集には小田が当り、全般にわたっては鏡山猛、岡崎敬両氏の助言を得た。また所収写真は小田の撮影にかかり、一部松岡撮影のものを使用した。

遺物整理には九州大学考古学研究室の久保山、前川、石松、宮小路賀宏の援助をうけた。

亀ノ甲遺跡調査関係者

福岡学芸大学	波多野晥三		
九州大学	鏡山猛	岡崎敬	小田富士雄
	松岡史	久保山教善	石松好雄
	前川威洋	船津隆造	
福島高校（定時制）	岩崎光		
三池高校	平野博之		
荒尾第三中学校	三島格		
日本考古学協会員	原田大六（昭和37年度）		
久留米大学医学部	竹重順夫		
福岡県教育委員会	渡辺正気		
八女市教育委員会	平島忠太郎 小島昇 松延繁 太中島茂五郎		

このほかに福岡学大久留米分校三池高校生徒若干名の応援があった。



（筑後市・蔵数）

この資料は筑後地方では珍らしい弥生中期の完形土器である。丹塗の優美な姿を呈するもので、亀ノ甲遺跡でもこの小破片が採集されている。（板付Ⅳ式）

REPORT ON
ARCHAEOLOGICAL RESEARCH
AT PREHISTORIC SITE OF KAMENOKO
YAME CITY, FUKUOKA PREFECTURE
1964

昭和39年2月15日発行

発行所　八女市教育委員会
福岡県八女市福島

印刷所　福岡印刷株式会社
福岡市上名島町53